

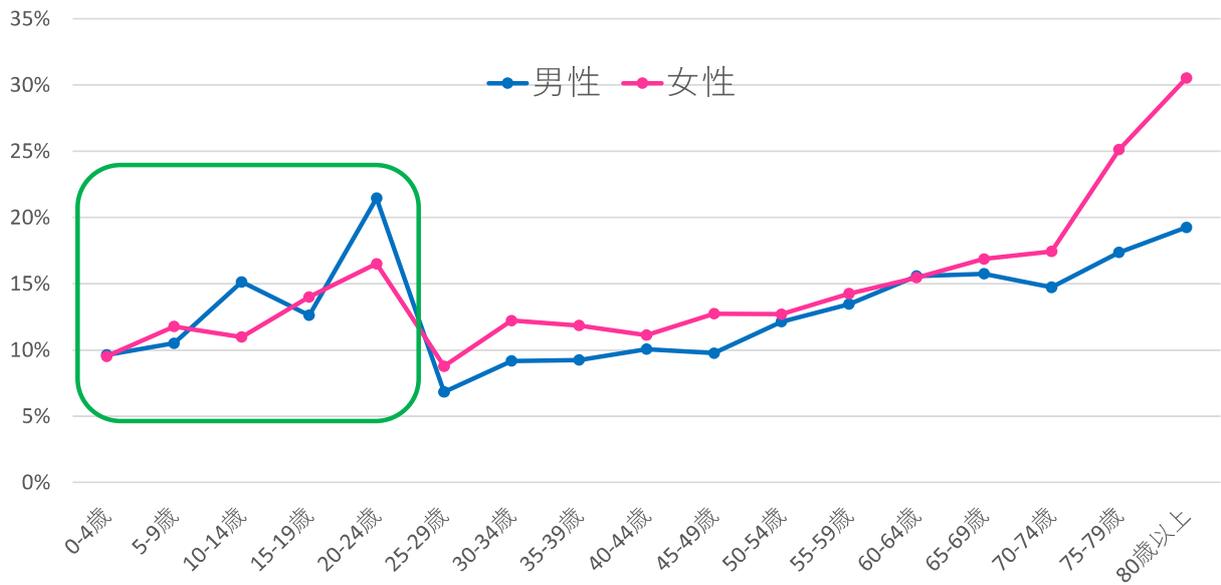
子どもの貧困の連鎖について

阿部 彩

東京都立大学 子ども・若者貧困研究センター

子どもの貧困率の現状

相対的貧困率：年齢層別、性別 (2021)

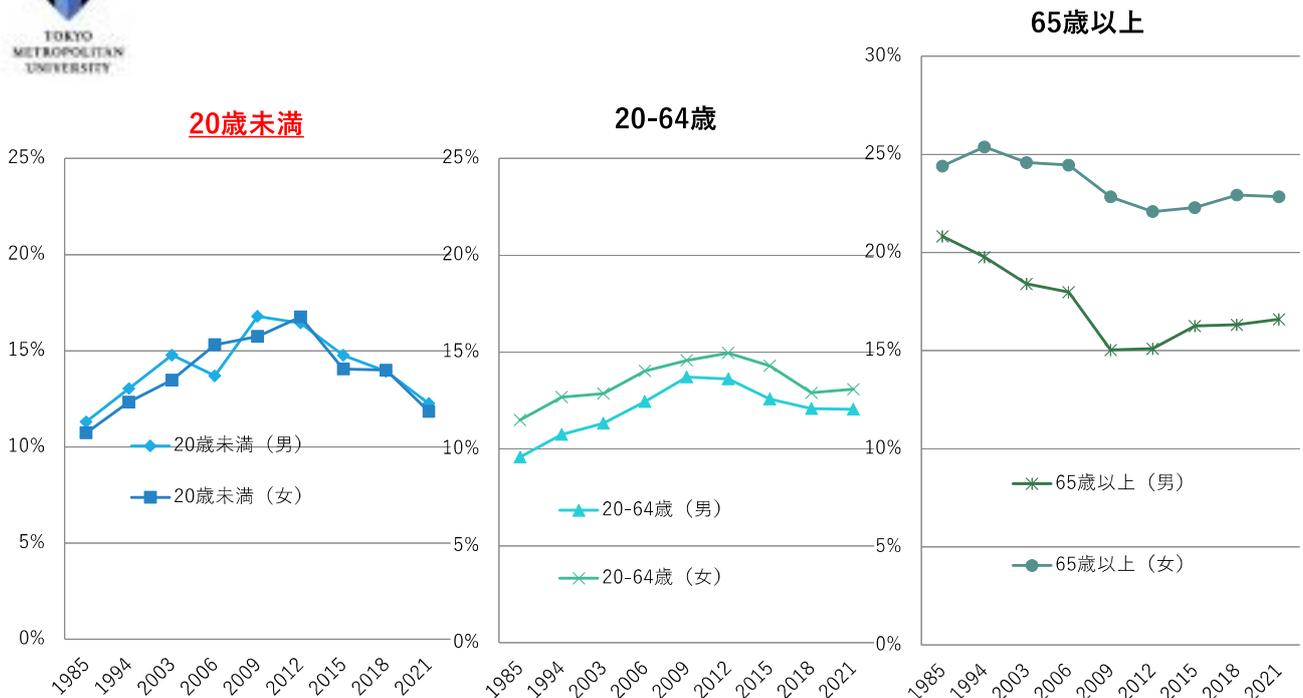


- 年齢層別・性別の貧困率を見ると、高齢期と若年期（20-24歳がピーク）の「山」が確認できる。
- 男性においては、20-24歳のピークが最も貧困率が高い年齢層となっている。
- 女性においては、高齢期（75歳以上）の貧困率が最も高く、25%を超える。
- 男女差を見ると、20-24歳、10-14歳では男性の方が高いものの、その他の年齢層では女性の方が高くなっている。

出所：阿部彩(2024)「相対的貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>



年齢3層別の貧困率の推移：1985～2021



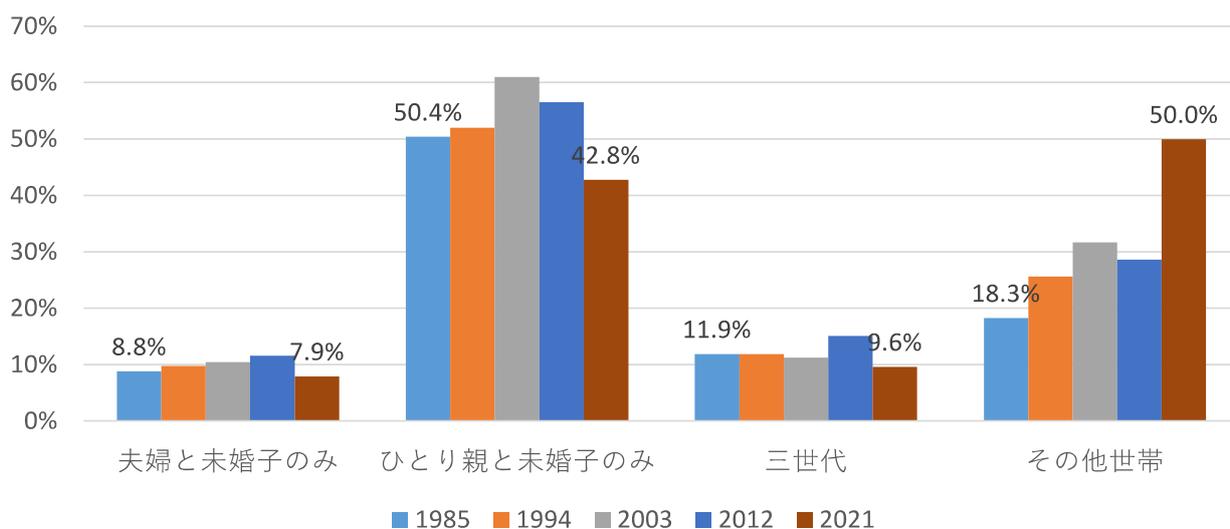
- 1985～2021年にかけて20歳未満と20-64歳は2012年をピークとする「山型」。しかし、2021年値は1985年値に比べ、依然として高いレベルにある。20歳未満の変動は、20-64歳より大きい。
- 65歳以上については、2009年、2012年を「谷」として減少傾向にあったものの、2009年、2012年から増加。女性高齢者については、貧困率が20%以上と高いまま、増加に転じている。

出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>

子どもの貧困率について3つの誤解

1. 貧困の子どもが増えている
2. 貧困の子どもは、殆どがひとり親（母子）世帯に属している
3. 年齢の低い子どもの方が、年齢の高い子どもよりも貧困率が高い

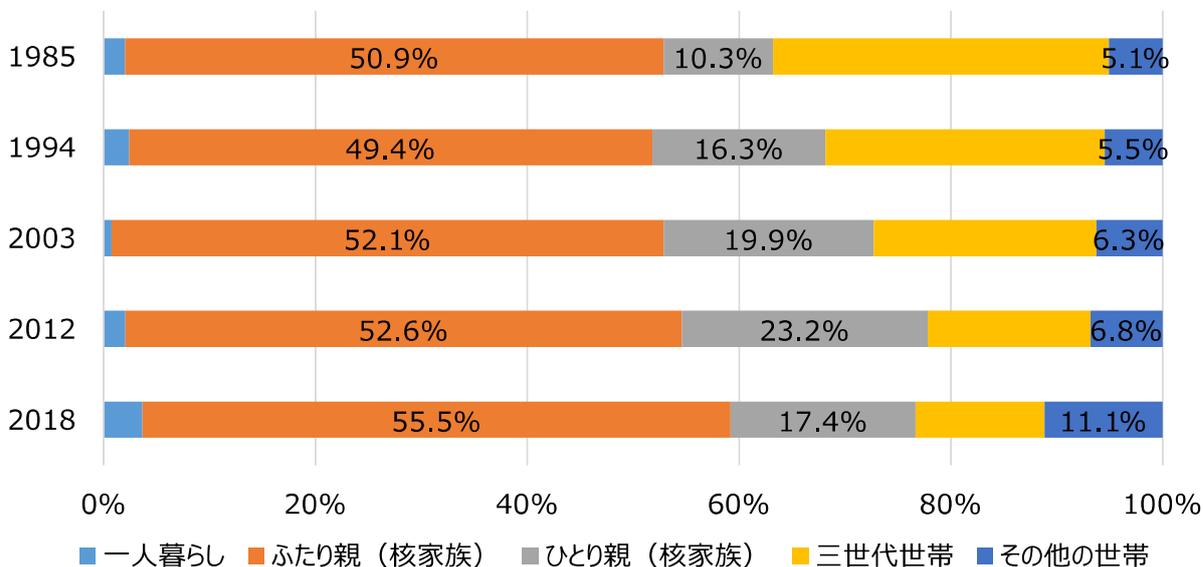
子ども（18歳未満）の貧困率の推移： 世帯タイプ別 長期



- 1985年と比べると、「夫婦と未婚子のみ」「三世代」世帯については、2012年をピークに上昇したが、2021年は1985年より低くなっている。
- 「ひとり親と未婚子のみ」世帯はピークが2003年であったが、同様の傾向。しかし、減少幅は、**36年かかっても、7.6%に過ぎない。**
- 「その他世帯」は貧困率が大きく上昇。最も貧困率が高いタイプとなった。

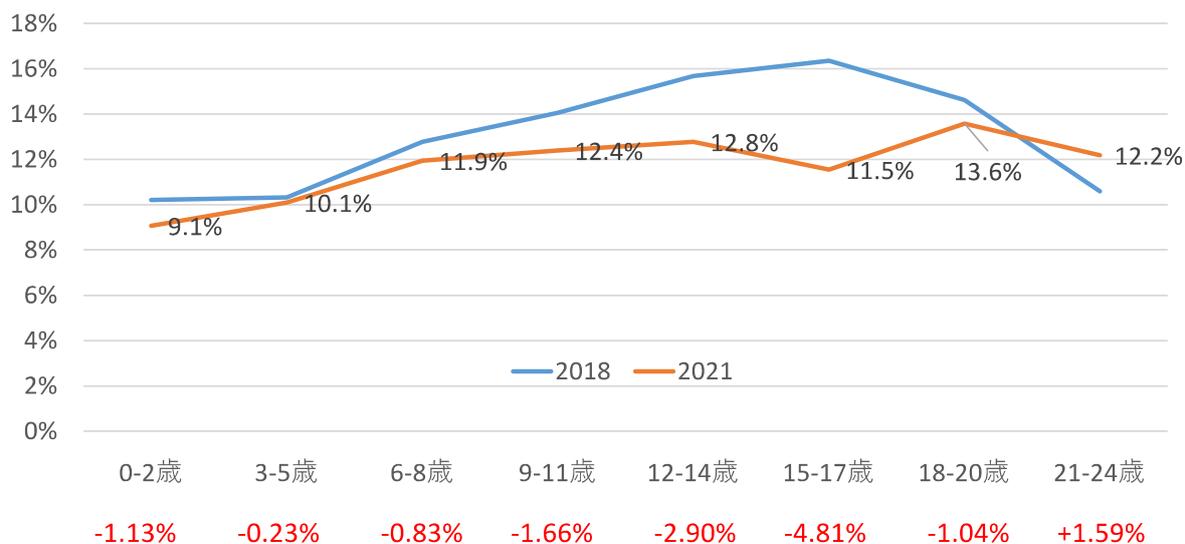
貧困の子どもは過半数は「ふたり親世帯」

貧困の子どもの世帯タイプ



出所：阿部彩（2022）「子どもの貧困率（2022/06/06更新）」 <https://www.hinkonstat.net/>

子どもの貧困率：年齢層別 2019～2021

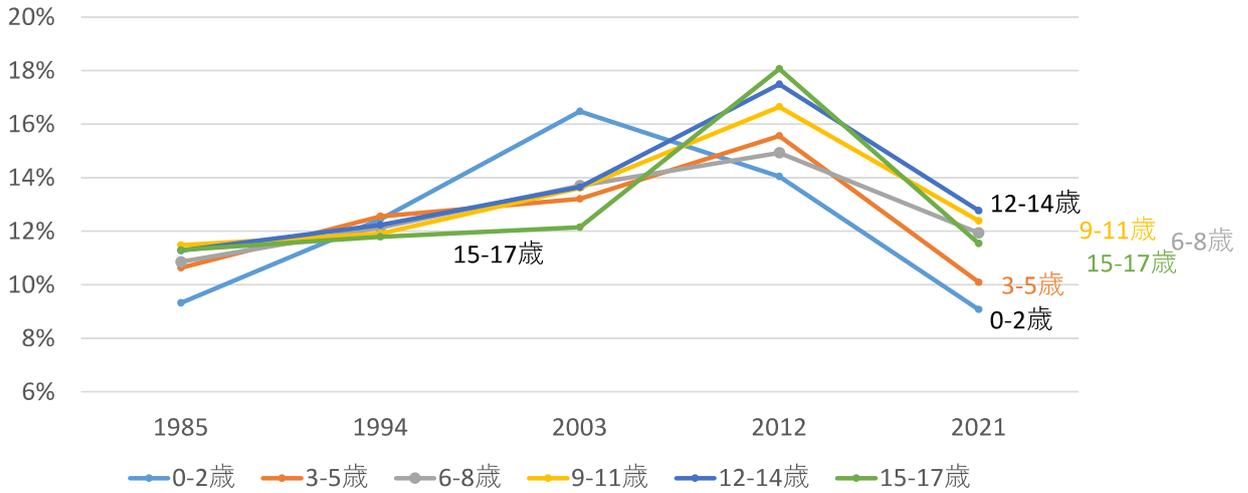


- 子どもの貧困率は、年齢が高いほど高い傾向があるが、18-20歳をピークに21-24歳は微減。
- 2018年から2021年にかけて、子どもの貧困率は18-20歳までは減少したが、21-24歳は上昇。
- 15-17歳、12-14歳にての減少幅が特に大きく、年齢が8歳以下においては減少幅は小さい。

出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>

子ども（0-17歳）の貧困率：年齢層別 1985～2015

子どもの年齢別 貧困率: 1985-2021

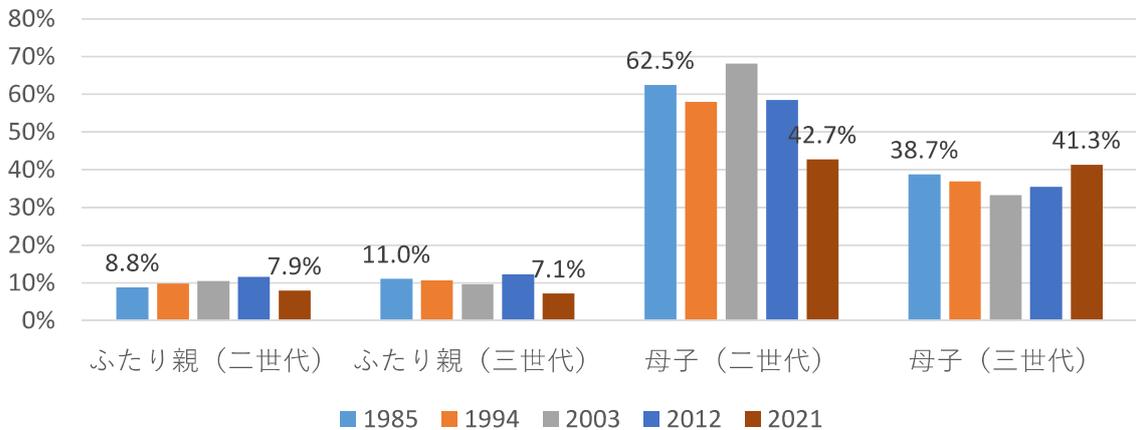


- 1985年は子どもの年齢層による貧困率の違いは小さかったが、格差が拡張している。
- 2021年は、就学前児童の貧困率の方が、年齢の高い層の貧困率より低い。
- 0-2歳は2003年をピークに下降している、それ以外の年齢は2012年がピーク。

出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>

詳細世帯タイプ別：二世帯世帯 vs. 三世帯世帯 1985～2021

世帯タイプ別：1985-2021



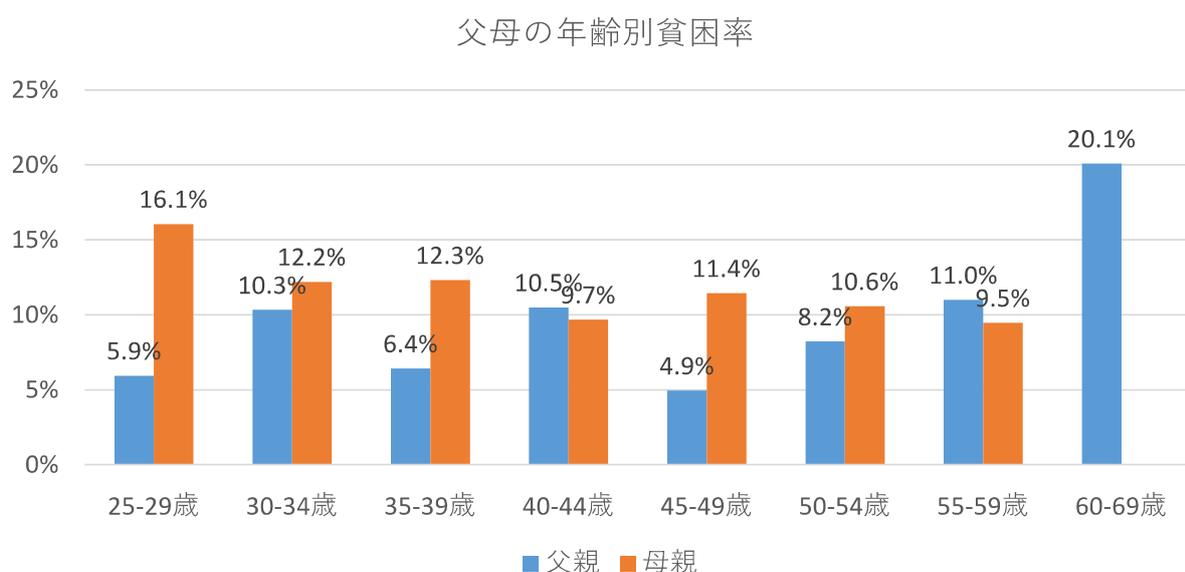
(*)父子世帯はサンプル数が少ないため推計不可。

- 長期的に見ると、母子（三世帯）世帯のみ貧困率が上昇している。母子（二世帯）世帯は、2003年をピークに貧困率は約20%ポイント減少している。

出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>

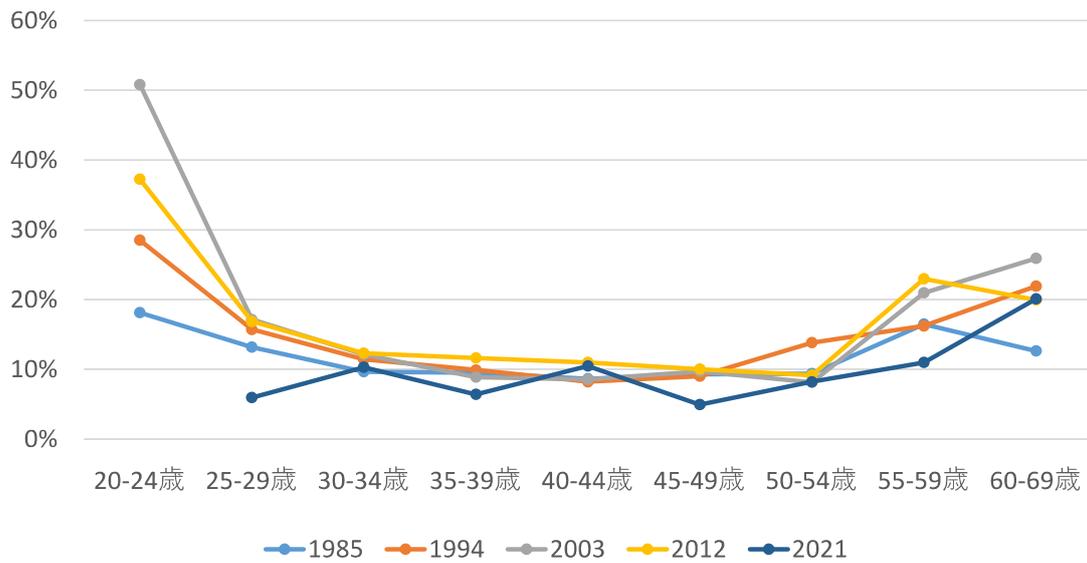
父母の年齢層別

子どもの貧困率：父母の年齢別（2021）



- 父母の年齢別の子どもの貧困率を見ると、年齢が60歳代の父親の場合と、25-29歳の母親の場合にて高い。

子どもの貧困率：父親の年齢別（1985～2021）

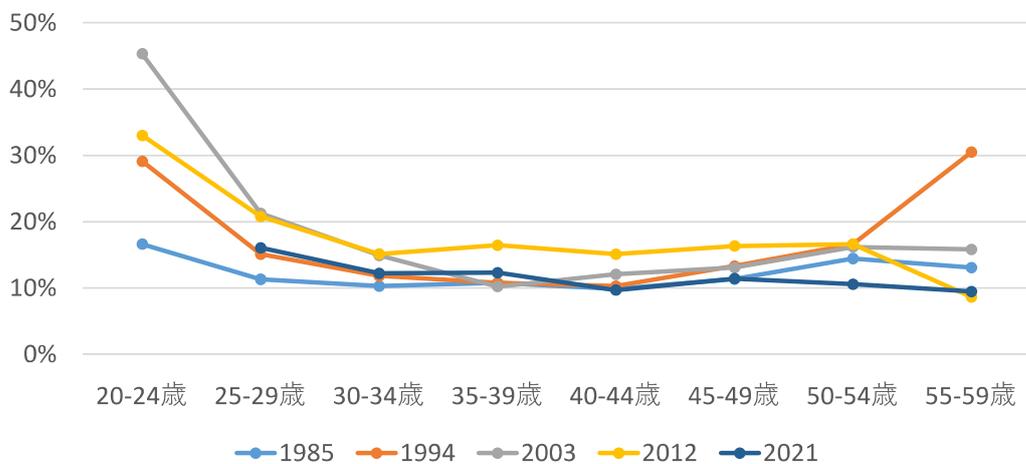


- 長期的に見ると、20-24歳の父親の場合の貧困率が高かったが、2021年については数も少なくなり貧困率の推計が不可能。
- その他の年齢層については、中年期は大きな変動はない。

出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>

子どもの貧困率：母親の年齢別（1985～2021）

母親の年齢別貧困率

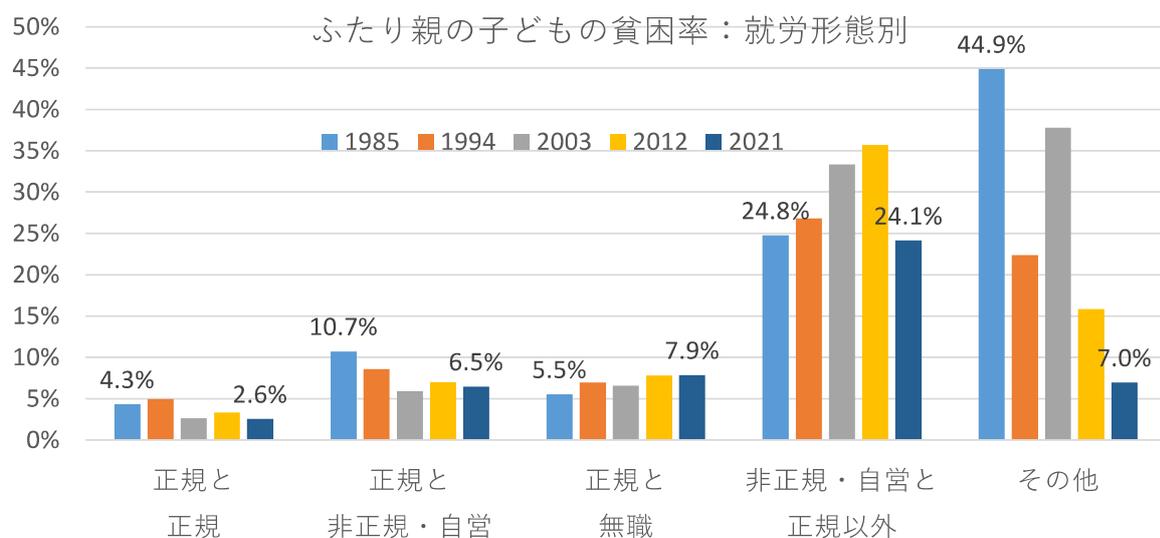


- 長期的に見ると、20-24歳の母親の場合の貧困率が高かったが、2021年については数も少なくなり貧困率の推計が不可能。
- 2021年は母親の年齢による格差は小さい。

出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>

父母の就業状況別

親の就労状況別貧困率（ふたり親世帯）：長期 父母の就労状況組み合わせ別



- 長期的に見ても、「正規と無職」世帯は、貧困率が増加。
- 「非正規・自営と正規以外」の世帯は、2012年まで増加したが、2021年には1985年とほぼ同等。
- 「その他」世帯は、貧困率が高かったが、2021年は他と変わらない。

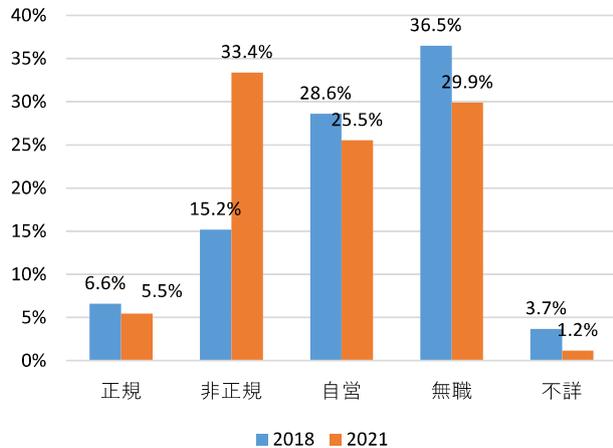
出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>

父母の就労状況別貧困率（ふたり親世帯）：2018, 2021

父親の就労状況別

父親の就労状況の貧困率（ふたり親世帯）：

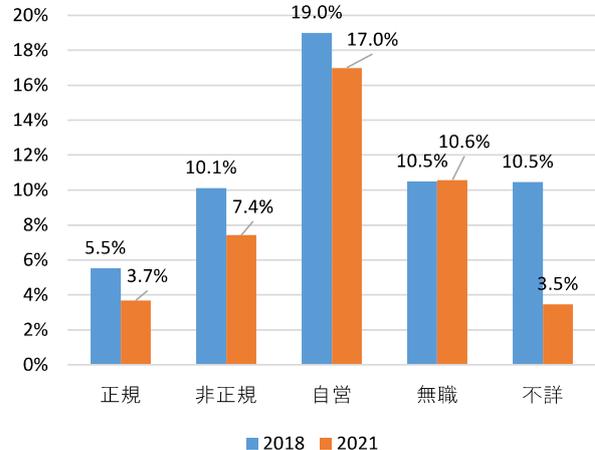
2018,2021



母親の就労状況別

母親の就労状況の貧困率（ふたり親世帯）：

2018,2021

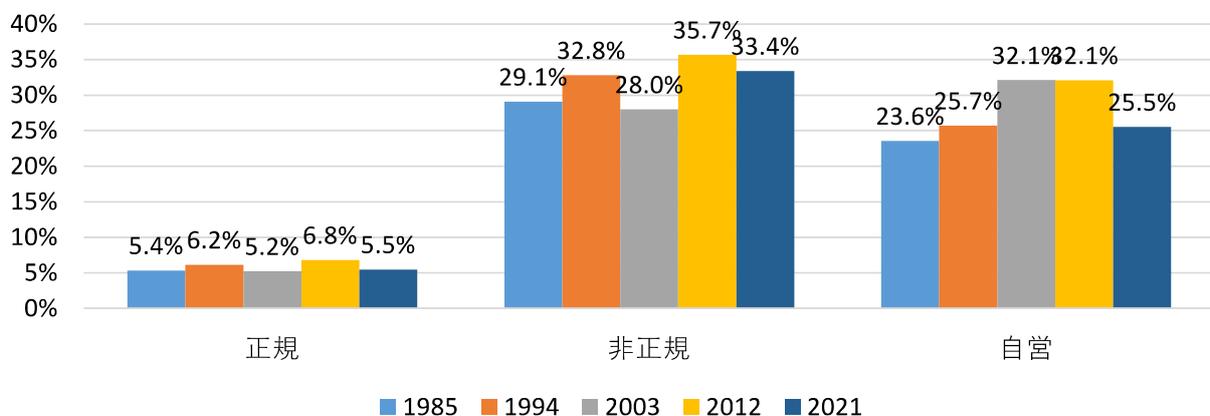


- 父親の就労状況別では、「非正規」の世帯の貧困率が倍増した。
- 母親の就労状況別では、「無職」の世帯の貧困率のみ変化なし。

出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>

父親の就労状況別貧困率（ふたり親世帯）：1985～2021

父親の就労状況の貧困率（ふたり親世帯）



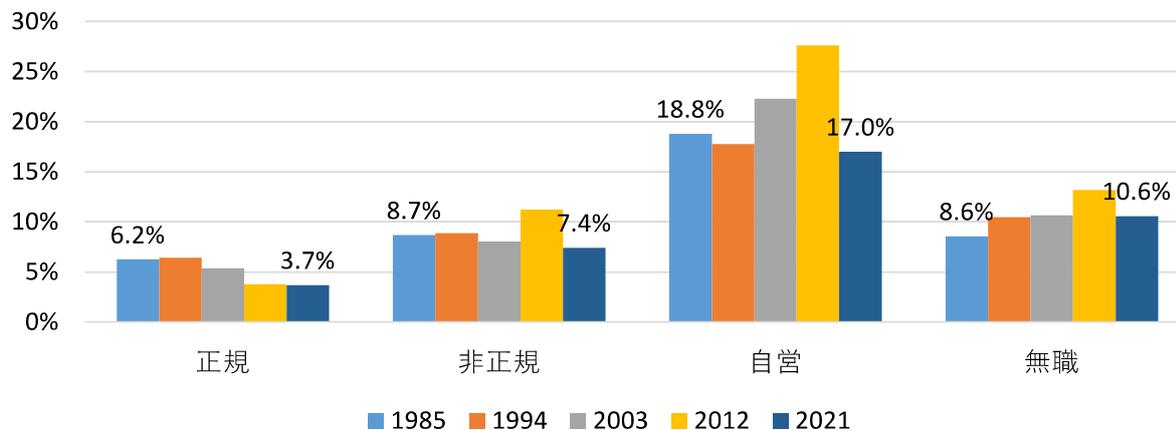
(*)無職と不詳はサンプルが少ない年があるため未記載

- 長期的に見ると、正規雇用の父親の世帯の子どもの貧困率はほぼ変化しない。「非正規」は、上昇。「自営」は2012年までは上昇したが、2021年は1985年に比べ微増。

出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>

母親の就労状況別貧困率（ふたり親世帯）：1985～2021

母親の就労状況の貧困率（ふたり親世帯）



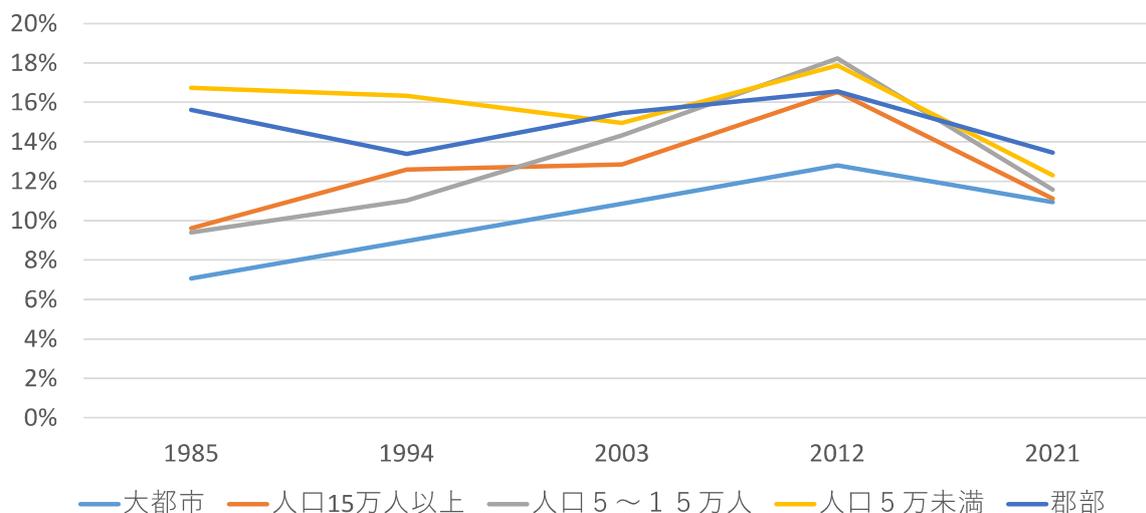
(*)不詳はサンプルが少ない年があるため未記載

- 長期的に見ると、正規雇用の母親の世帯の子どもの貧困率は6.2%から3.7%に減少した。「非正規」「自営」は減少。母親が「無職」の場合は、貧困率は増加。

出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>

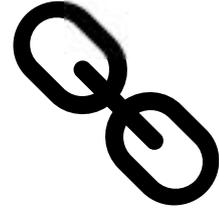
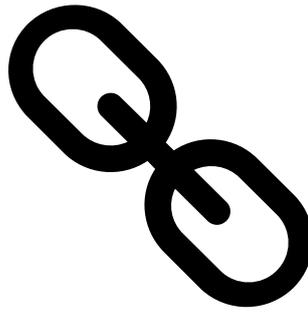
子どもの貧困率：都市規模別 1985～2021

都市規模別

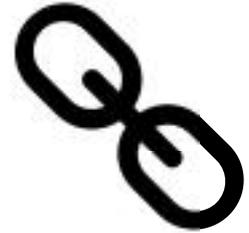


- 都市規模別の子どもの貧困率の格差は、かつては「郡部」「人口5万未満」と、「大都市」「人口15万人以上」「人口5～15万人」にて大きな差があったが、現在は、格差が縮小している。

出所：阿部彩(2024)「子どもの貧困率の動向:2022年調査Update」 JSPS 22H05098, <https://www.hinkonstat.jp/>



貧困は連鎖するか



子ども期の
の
貧困



大人期
の
貧困

海外：貧困の連鎖（Duncan & Brooks-Gunn 1997, Mayer 1997, Bowles, Gintis & Groves 2005）
親子の所得や賃金の相関(Mazumder 2001; Solon 1992; Zimmerman 1992)

日本:

Abe 2011, Oshio, Sano & Kobayashi 2010, Oishi 2007, Abe 2007 – Using population-based survey of Japanese adults and their retrospective answers about SES during their childhood, showed the childhood poverty is correlated with current income, poverty, and bad health.

Komamura, Michinaka & Maruyama(2011) – 被保護母子世帯の母親は子ども期に生活保護世帯に育っている確率が高い

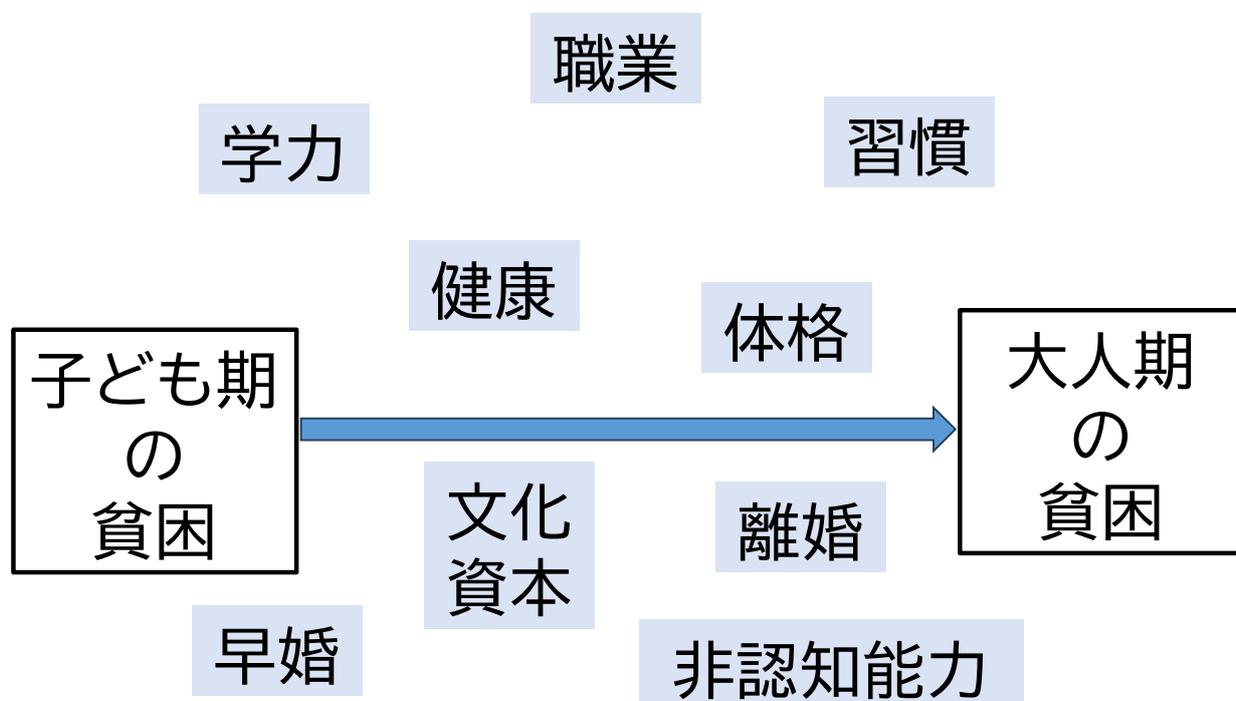
世代間連鎖は、あらゆる「不利」にて起こっている

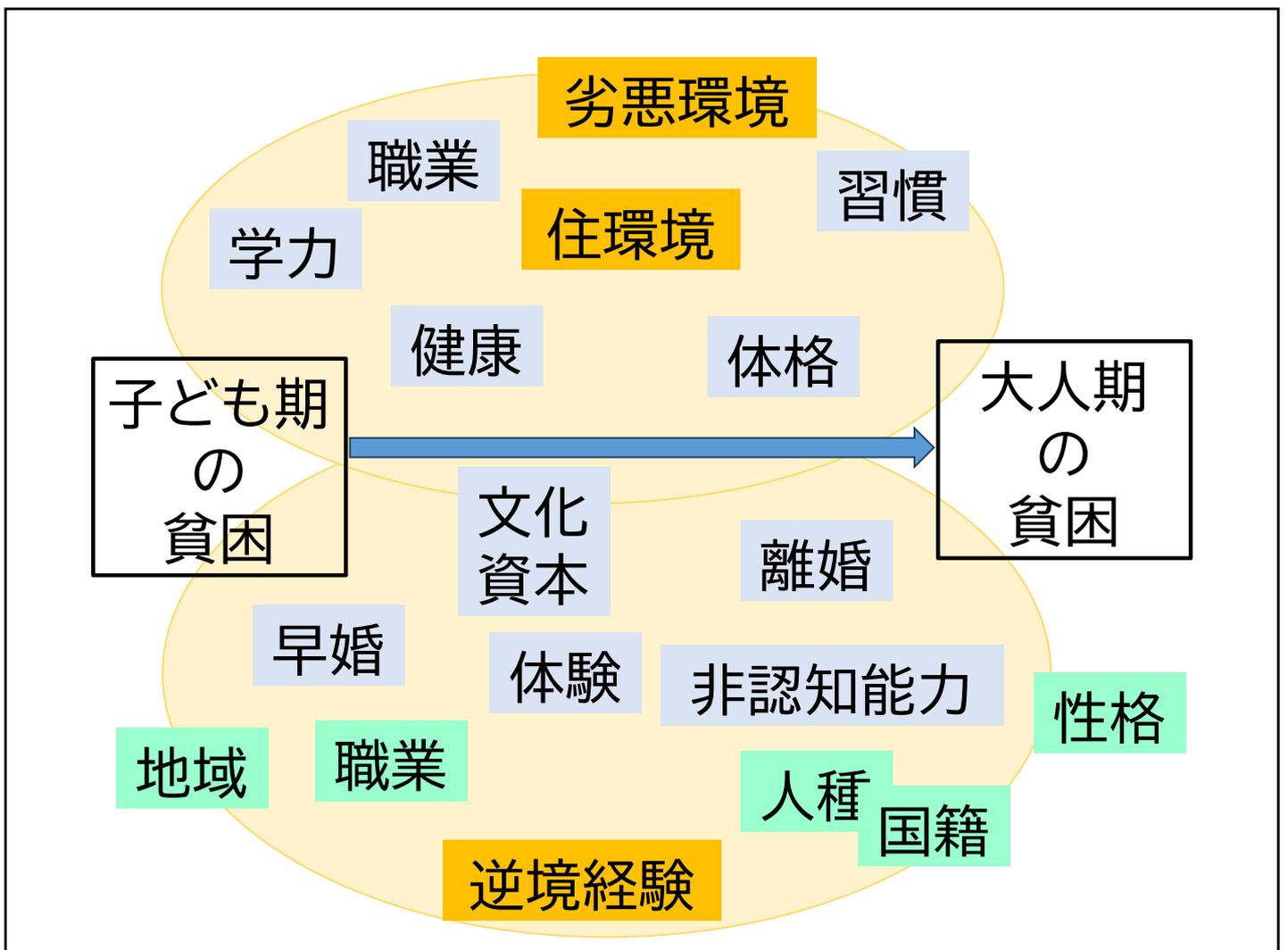
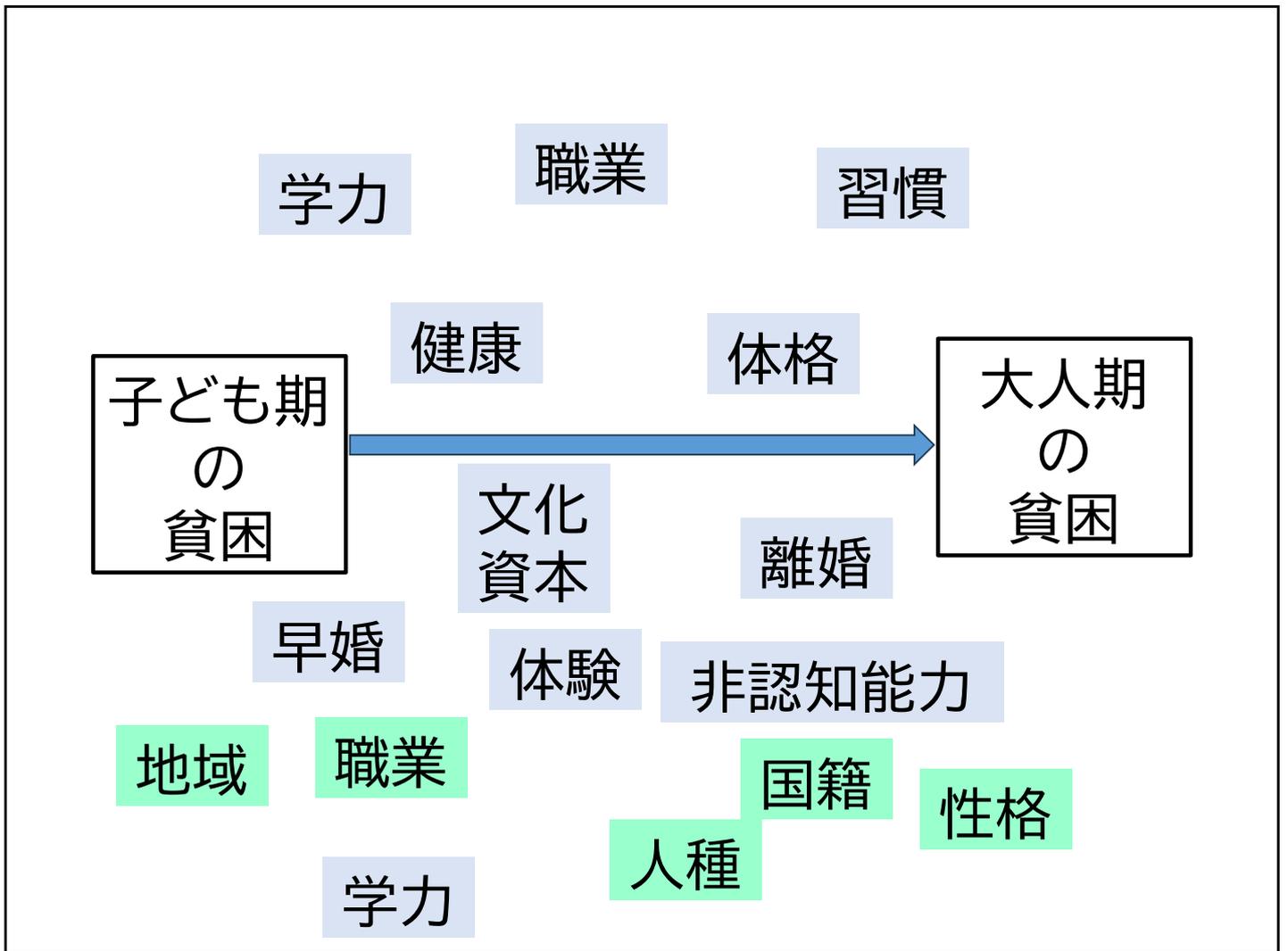
日本においても、各学会より世代間連鎖のエビデンスが得られている：

- 学歴 社会教育学 荻谷 など
- 職業 社会学
- 離婚
- 世帯タイプ（母子世帯の連鎖）
- 児童虐待



むしろ連鎖していない不利を探す方がタイヘン！





逆境経験（ACE）

A = Adverse

C = Childhood

E = Experiences

子ども期（0～18歳）に経験した家庭内外の深刻なストレス体験やトラウマ体験

- 児童虐待（身体的・心理的・性的、面前DV、ネグレクト）、家庭の機能不全（親などの精神疾患、アルコール依存、離婚、服役など）
- 近年は、貧困、差別、いじめ、地域暴力、災害体験なども含まれる



出所：mentalcare-lab(2006) HP <https://mentalcare-lab.com/ace/>

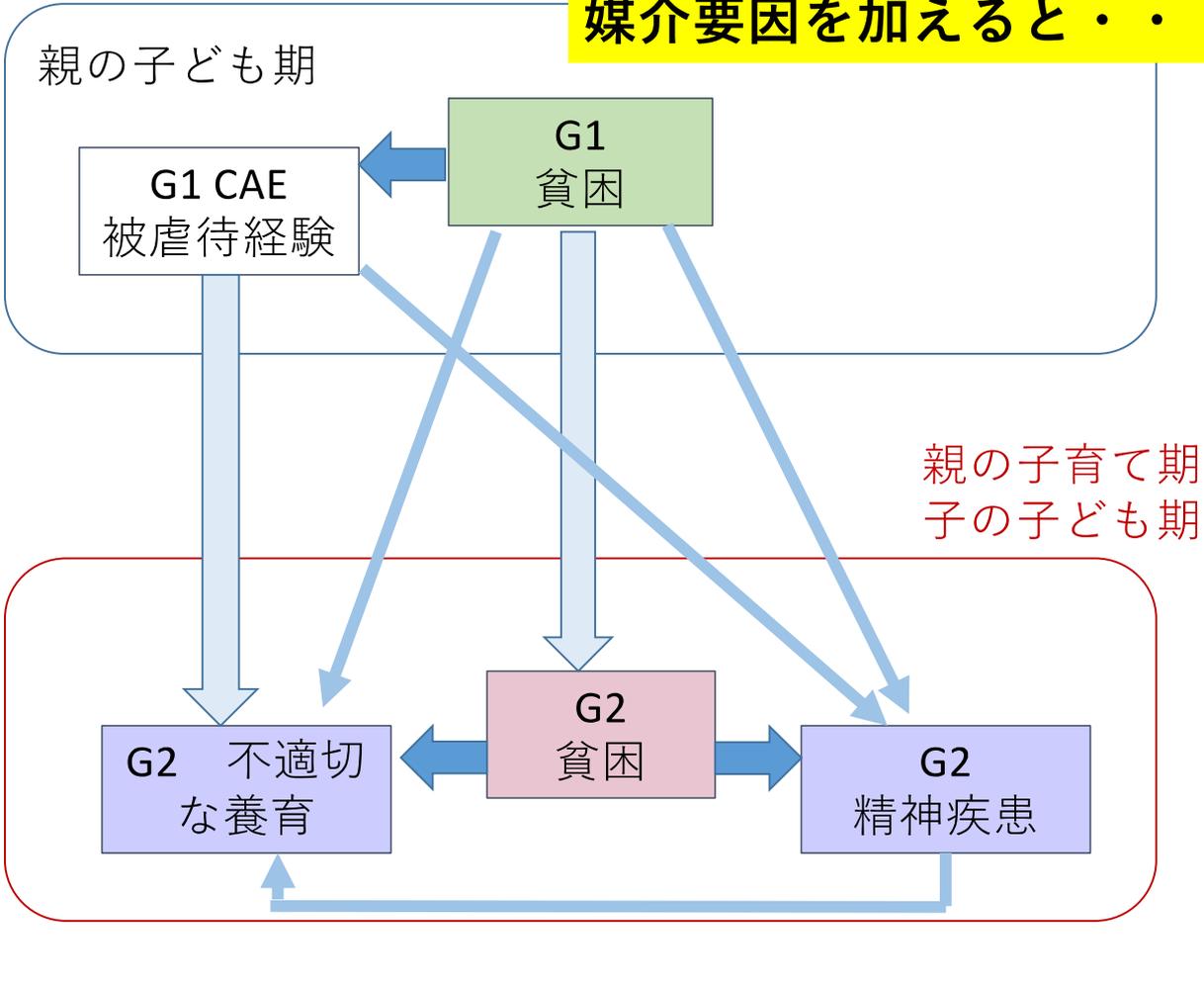
暴力の連鎖：先行研究

- 日本を含め、暴力の連鎖のエビデンスは多数 (Widom & Wilson 2015).
 - Pears & Capaldi 2001 , Heyman and Slep 2002
 - Panel survey: English et al. 2001, Smith & Thornberry 1995, Smith et al. 2008
 - Aida & Okawara (2014) 東京の保育所を利用する 543 人の母親を対象に、自身の母親から拒絶(denial)やネガティブな感情を感じた母親は、自分の子育てに関して不安、疲れ、自信のなさを感じるリスクが高い。また、自身の母親から拒絶やネガティブな身体的感情(身体的痛みや, feeling sick etc.)を感じた母親は、自分の子どもが反抗的な態度をとった時に自分を被害者と感じる確率が高い。
 - Dussich & Maekoya (2007)- 大学生のデータを用いて、家庭における暴力の経験が、いじめの加害者となる確率と関連している。
 - Fujiwara, Okuyama & Izumi (2010) 母子施設に入所している母子 304 ペアのデータを用いて、CAH (childhood abuse history:子ども期の被虐待経験)がある母親は、自分の子どもへの身体的および精神的虐待をする確率が高い(しかし、ネグレクトは統計的に有意ではない)。また、CAHと子どもへの虐待の媒介要因として、母親の精神問題
 - 周(2019) は、一般世帯の母子 4072 ペアのデータ(子どもの年齢は18歳未満)を用いて、自己申告による「いき過ぎた体罰」は、母親の子ども期の逆境経験(親からの身体的虐待)と統計的に有意な関連がある(現在所得、現在の食料困窮経験、現在の家計の状況をコントロールしたLogistic分析)。

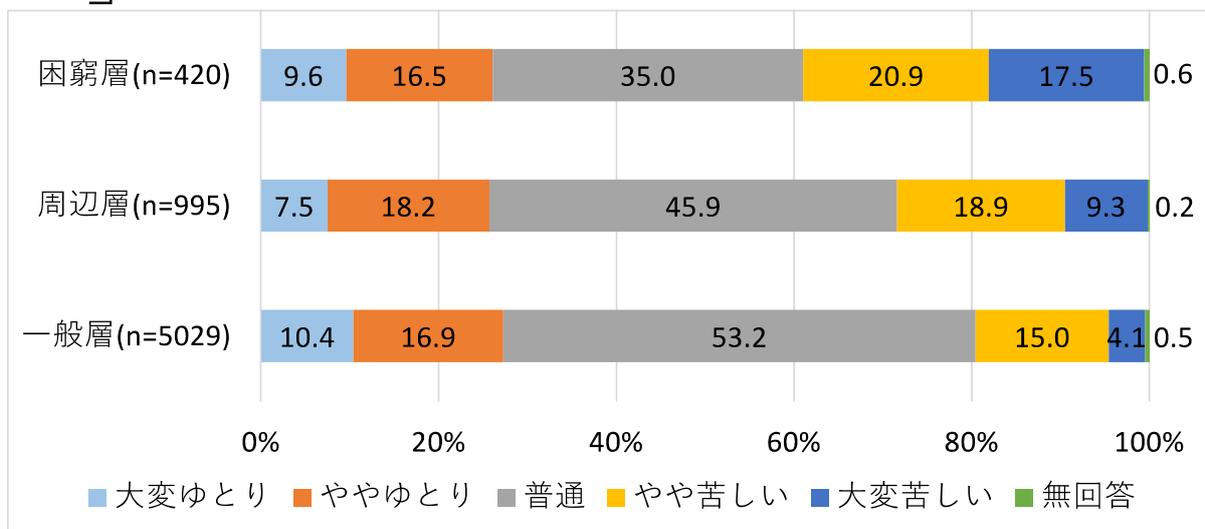
暴力の連鎖が起こる理論 (Widom & Wilson 2015)

1. Social Learning Theory
2. Attachment and relational dis-function theory
3. Social information processing theory
4. Neurophysiological model
5. Genetic (heredity)

媒介要因を加えると・・・



貧困の連鎖 保護者の15歳の時の「暮らし向き」

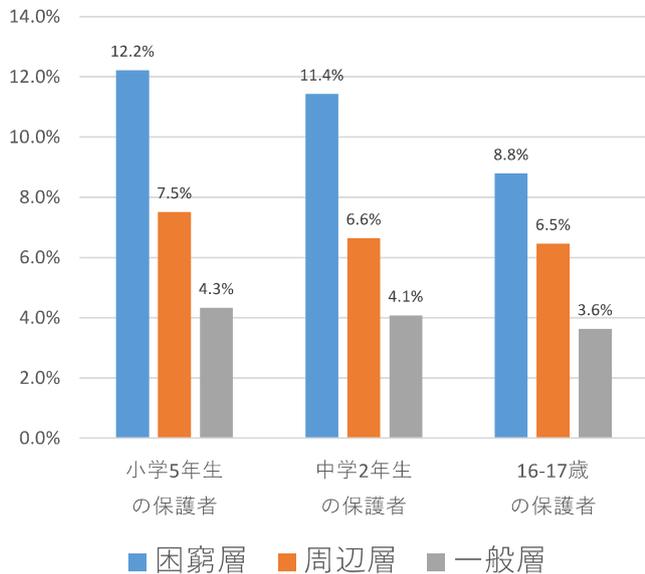


- 困窮層においては、保護者が15歳の時に「大変苦しい」生活をしてきた割合が多い。

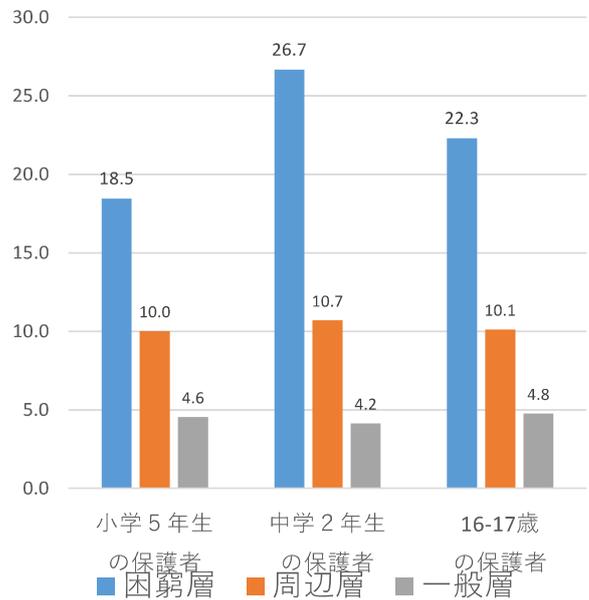
出所： 阿部 彩 (2017) 「世代を超えた不利の蓄積」東京都 子供の生活実態調査 詳細分析報告書 (2018.公表)

親自身の暴力被害の経験

保護者が成人となるまでに「親から暴力」を経験した%

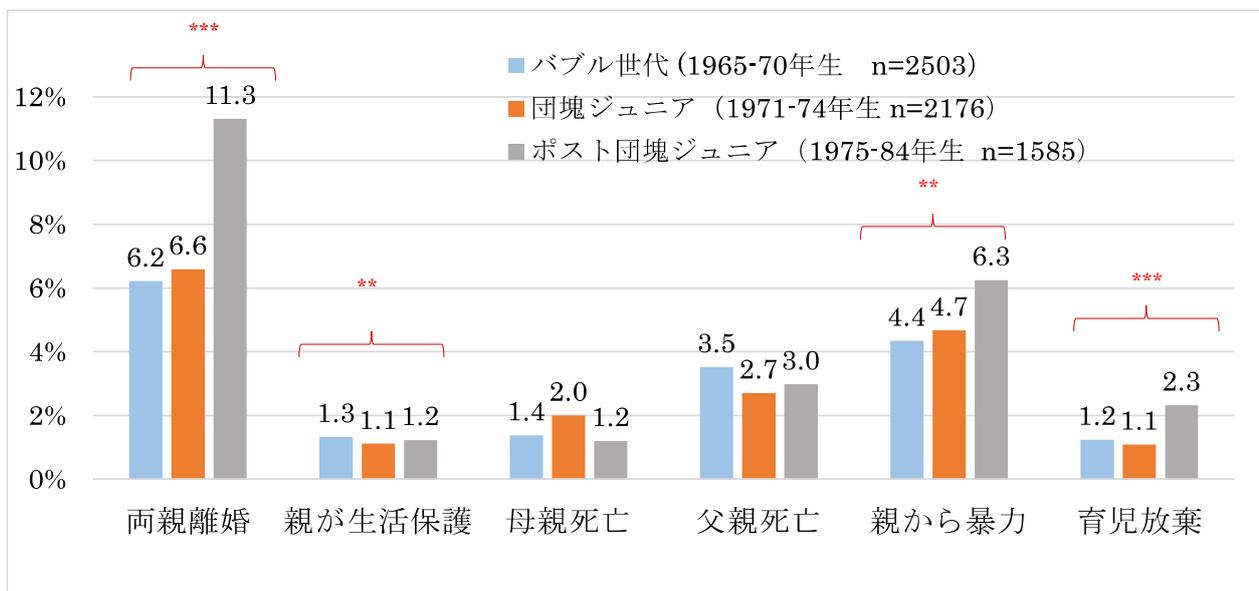


「(元)配偶者(パートナー)から暴力を受けた」と回答した母親の割合



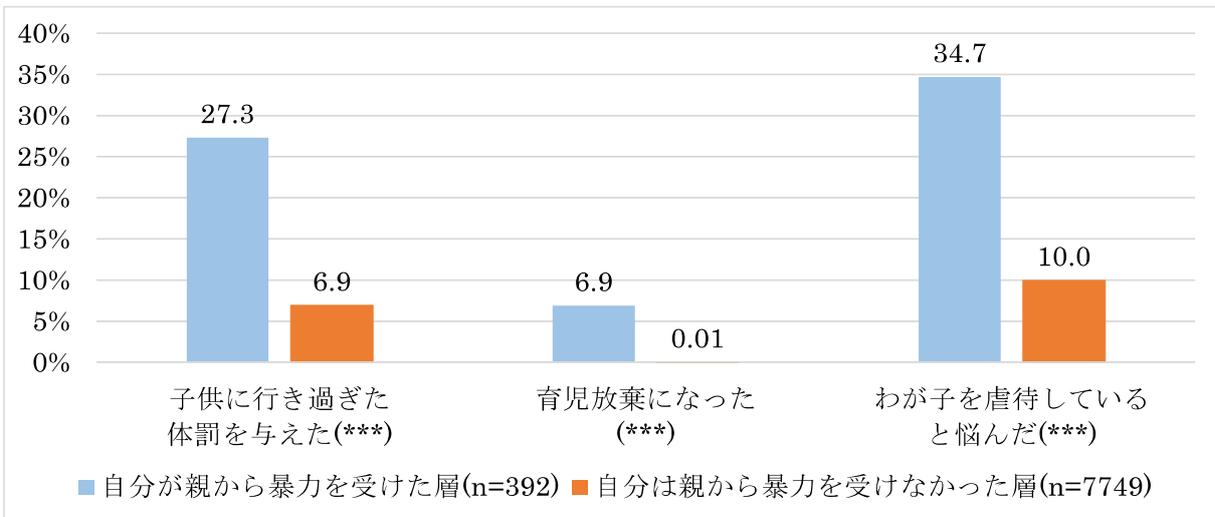
出所： 首都大学東京 子ども・若者貧困研究センター 「東京都子供の生活実態調査 詳細分析 報告書」 (2017)

以下の逆境を「成人となるまでに経験した」と回答した母親の割合 (小学5年生、中学2年生、16-17歳合体)



- 若い世代ほど、さまざまな逆境を経験している

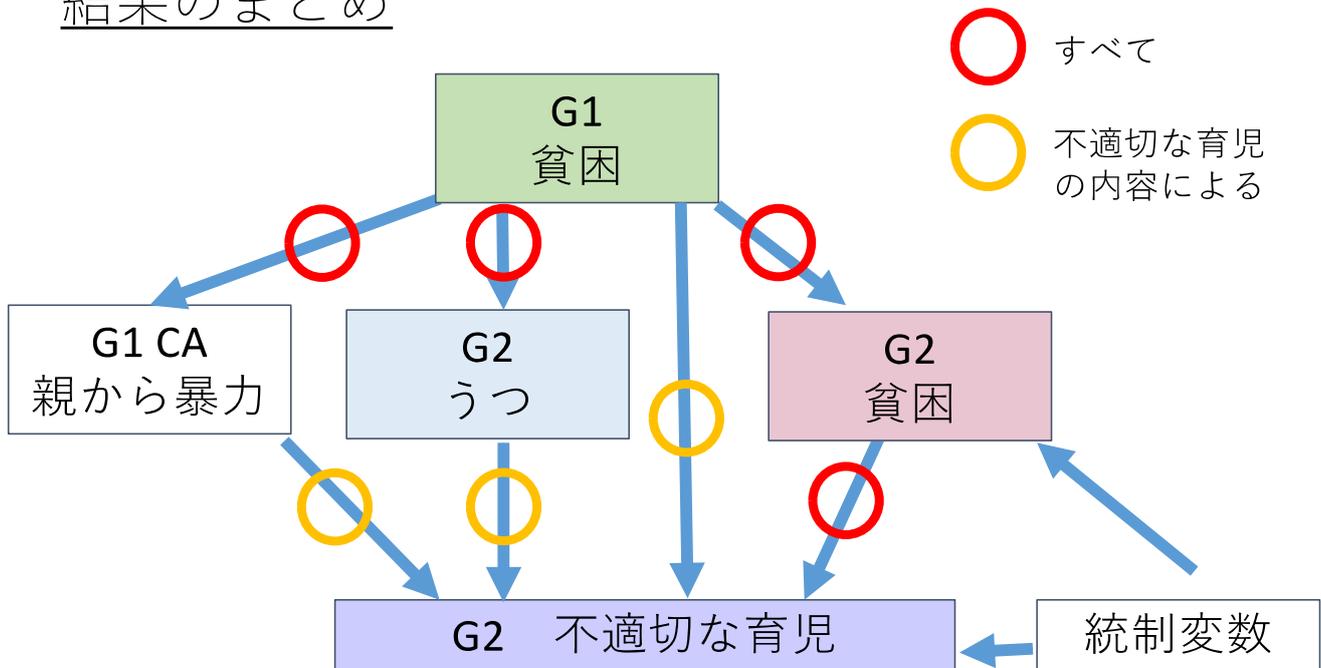
暴力も連鎖する



- 「自分が親から暴力を受けた」を考えている母親は、そうでない母親に比べて圧倒的に、自分自身も子どもにも体罰を与えていたり、育児放棄、虐待をしていると考えている。

出所： 阿部 彩 (2017) 「世代を超えた不利の蓄積」東京都 子供の生活実態調査 詳細分析報告書 (2018.公表)

結果のまとめ



- 親のCA経験、親のうつ、親の貧困、祖父母の貧困との関連を同時に考慮した時においても、それぞれの関連が残る → **どの要因も重要!**

しかし . . .

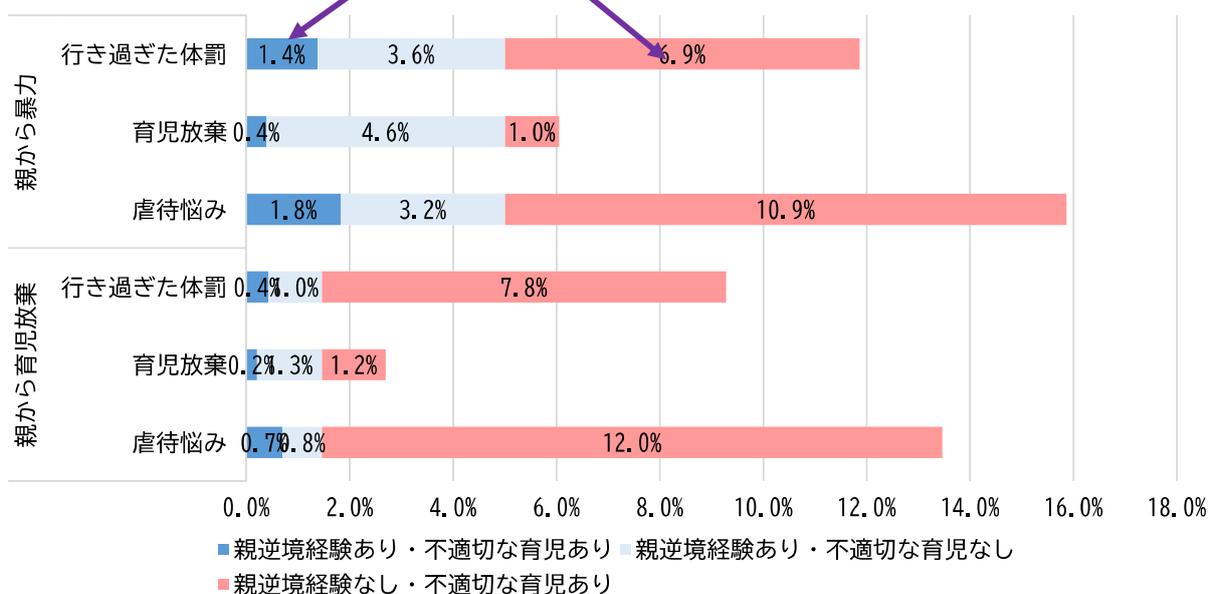
- より大きな問題は、大多数の「虐待の連鎖」を抱えていない親ではないか？

「虐待の連鎖」が起こっていない世帯における「不適切な養育」は、なぜ起こるのか？



「虐待の連鎖」は「虐待」のマジョリティではない

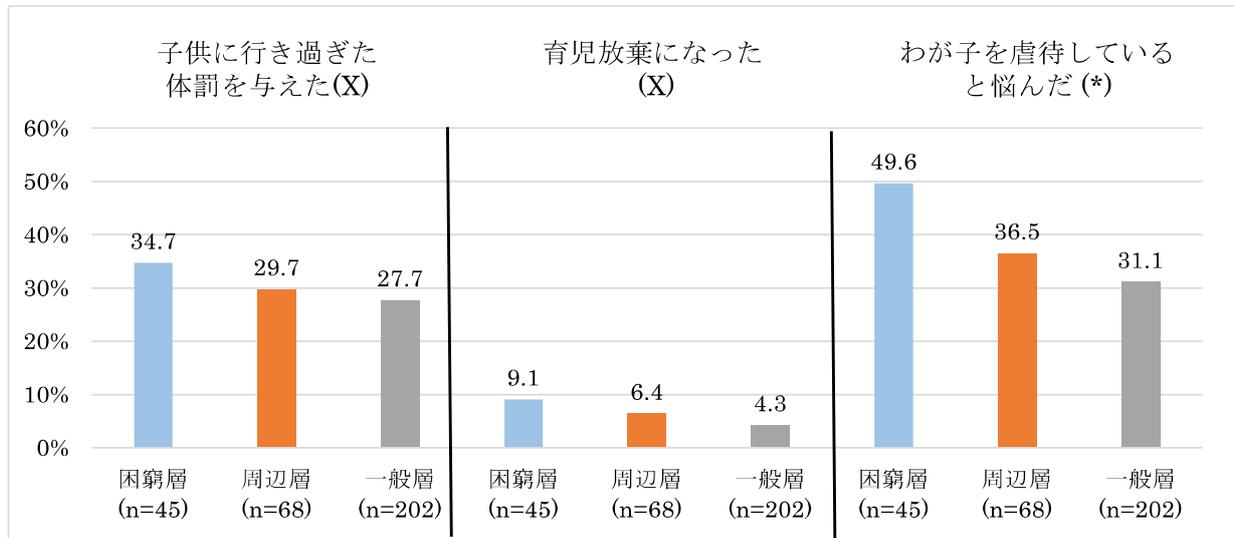
ピンクの方が断然大きい！



- これら「不適切な育児」をしている経験がある母親の大多数は、「虐待の連鎖」のケースではない（濃青とピンクの比較）
- 自分自身に被虐待経験があると認識している親も大多数は、「不適切な育児」をしていない（濃青と薄青の比較）。

連鎖しているのは何か：

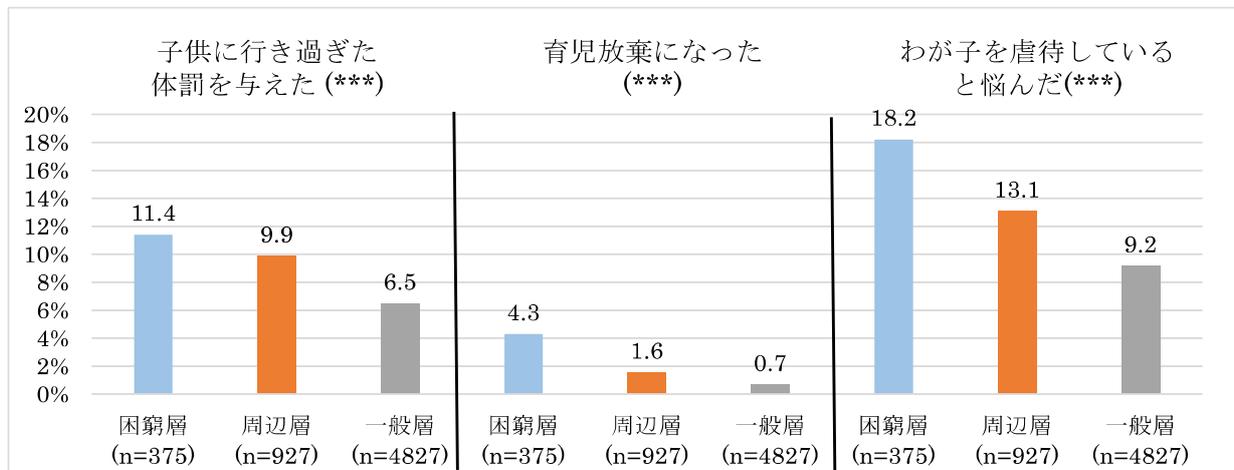
子供への行き過ぎた体罰、育児放棄、虐待（悩み）の経験：生活困難度別（親から暴力を受けた経験がある保護者のみ）



- 自分自身が親から暴力を受けた経験が「ある」母親は、現在の生活困難にかかわりなく子どもに体罰・育児放棄・虐待していると考えている。

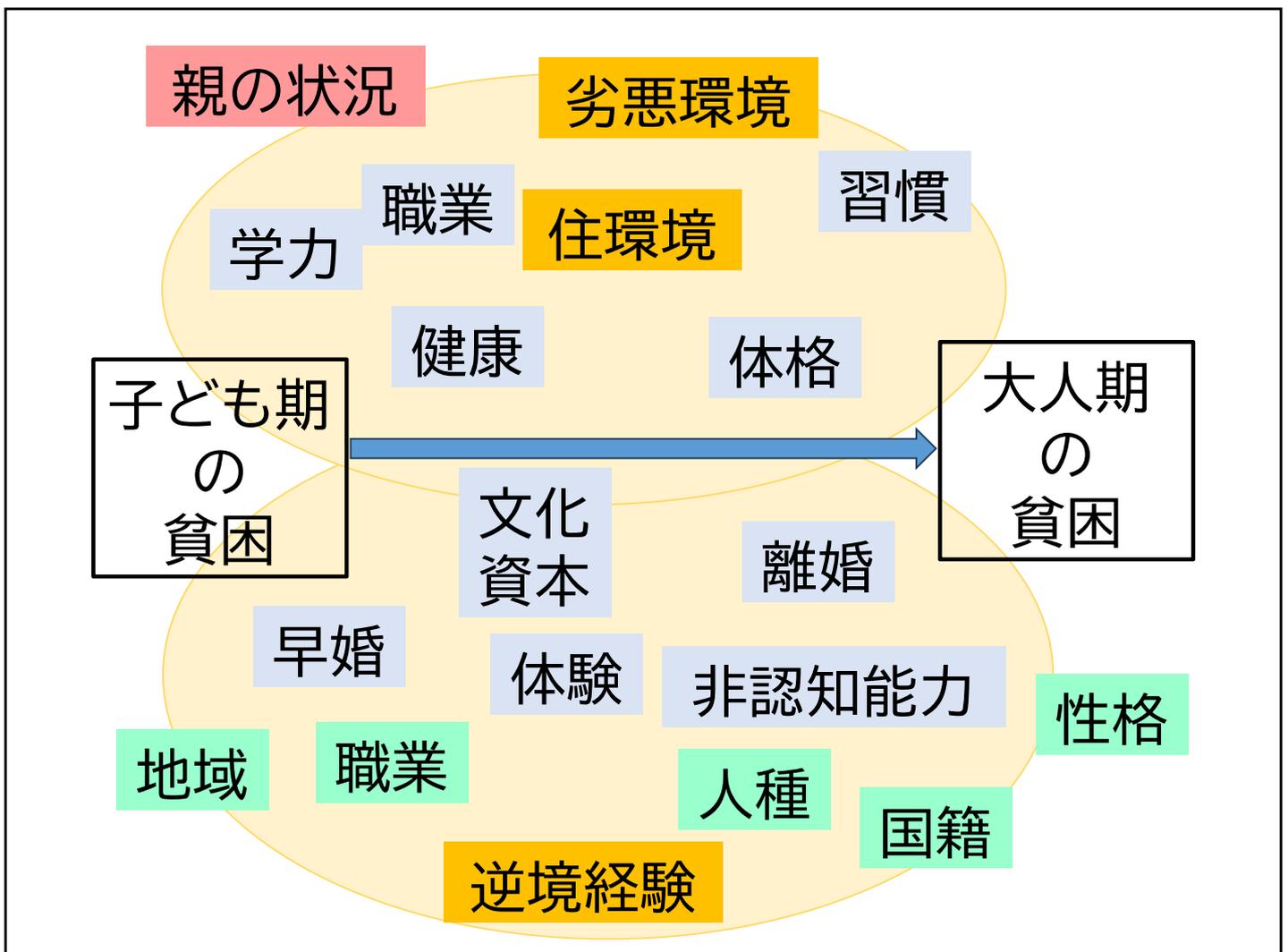
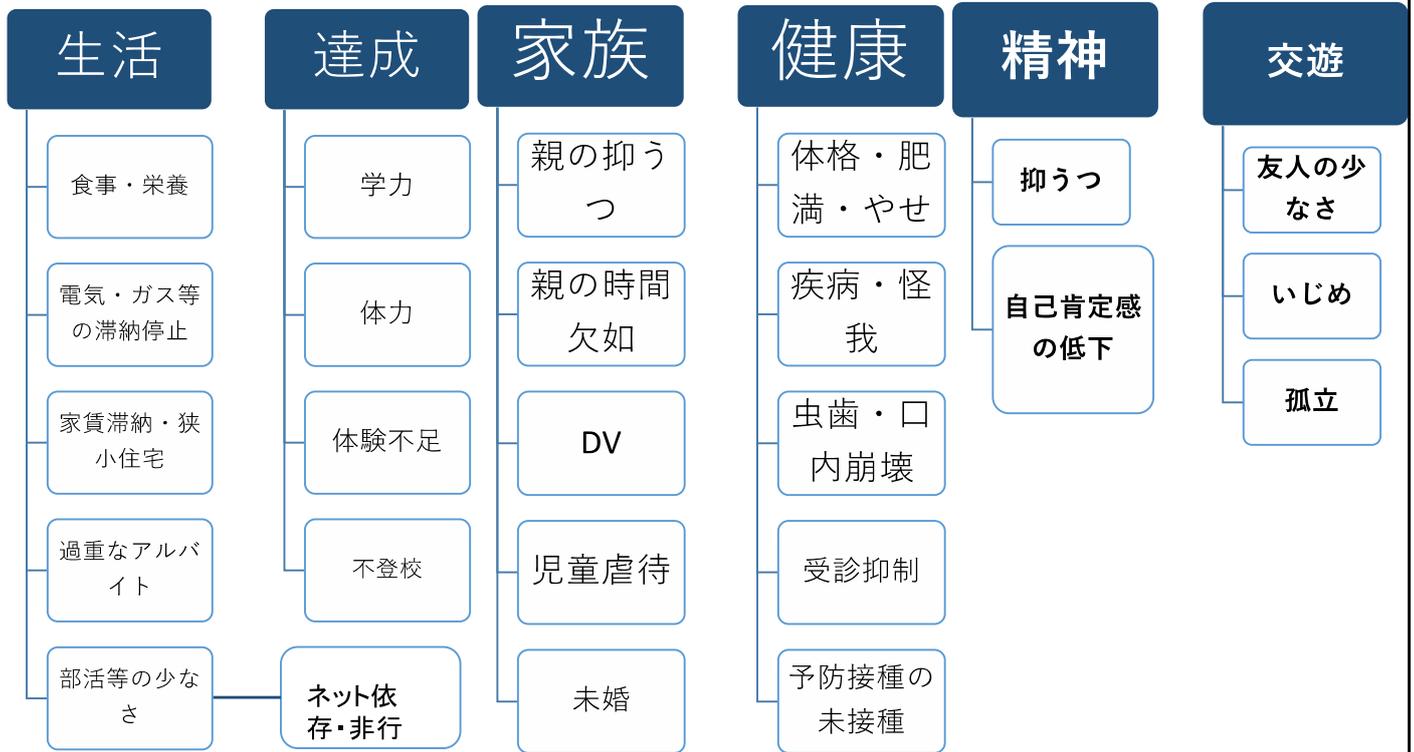
連鎖しているのは何か：

子供への行き過ぎた体罰、育児放棄、虐待（悩み）の経験：生活困難度別（親から暴力を受けた経験がない保護者のみ）



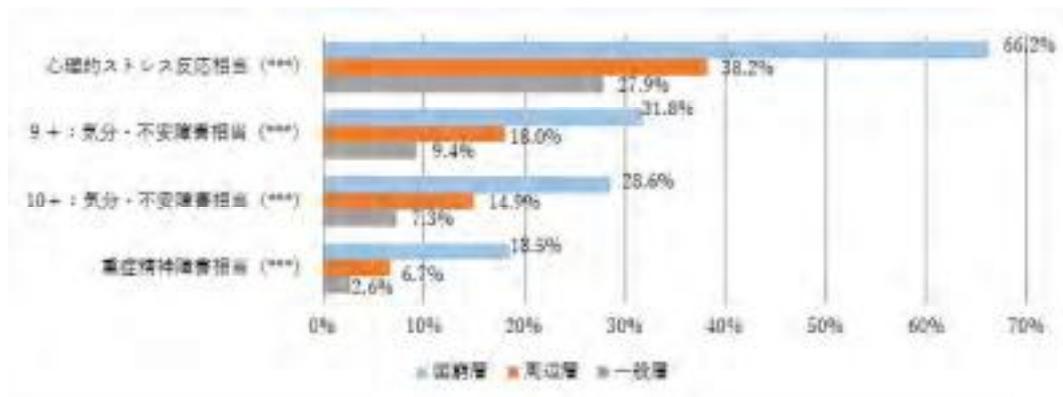
- 自分自身が親から暴力を受けた経験が「ない」母親は、現在の生活困難度が厳しいほど、子どもに体罰・育児放棄・虐待していると考えている。

(日本のデータにおいて)
相対的貧困と関連が立証されているもの

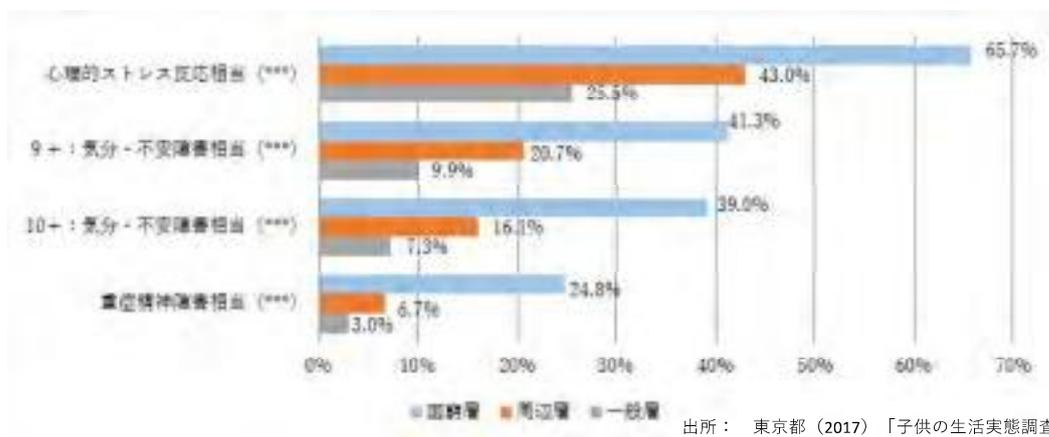


親の抑うつ傾向

小学5年生の子どもの保護者



16、17歳の子どもの保護者



出所：東京都（2017）「子供の生活実態調査（小中高高校生）」報告書⁴³

重要なのは・・・

- 「運命論」に絶望しない！
- 「連鎖」はあるものの、**殆どは「連鎖」しない**
- **重要なのは、「連鎖」の縛りを、いかに社会にて緩めるか。**



子ども・若者
貧困研究センター

